

## 研究ノート

# 看護学生の自己教育力の 向上を目指した取り組み ーリフレクションの成果と課題ー

Efforts aimed at improving self-education ability of nursing students

: The achievements and challenges of reflection

吉澤裕子

Hiroko YOSHIZAWA

保健福祉学部保健看護学科

キーワード：自己教育力，リフレクション，グループ群，教員介入群

## 抄 録

本研究は、看護学生が学習課題や実習といったストレッサーに耐えられるような自己教育力の向上を目指した取り組みである。学生5～6人のグループ（グループ群）による授業のリフレクションと教員の介入（教員介入群）によるリフレクションの効果を、3分類14項目の側面から検証した。その結果、グループ群では14項目のうち13項目において、教員介入群では全項目において理論的中央値より有意に差があることが分かった。このことから、リフレクションが「創造的な学習」「コミュニケーション力」「学習に対する自覚的姿勢」の3分類において効果的であることが示唆された。また、グループ群と教員介入群の比較を行ったところ、グループ群よりも教員介入群の方がリフレクションの自己評価が高いことが明らかとなった。しかし、このリフレクションの目的は、学習効果の自覚的意識ではなく、自己教育力を養うことにある。そこで、自由記述を概観したところ、学習意欲が低く私語に流れる学生がいるなど、受身的傾向が強く、知識の定着や学びを深めるという自覚の希薄さが感じられる学生もみられた。また、グループディスカッションのねらいを理解して取り組んでいたとは言い難く、主体的な学びに繋がらない学生がいることも明らかとなった。これらのことから、本研究において、自己教育力を養うためにリフレクションの効果はあるものの、クラス全体の学習意欲を上げるなど参加型授業としての工夫が課題であることが分かった。

## I. 緒 言

大学教育において、学生一人ひとりが学習能力を身につけ目標に向けて取り組んでくれることは教員としての願いである。しかし、将来の目標が明確であるはずの看護学生ですら、授業を受ける姿勢に主体性が感じられないのが現状である。西田ら（2013）は、「医療系学科の学生は学習性無気力、つまりは高い抑うつ傾向とそれに伴う自尊感情の低下、および強いストレス反応の状況がある」<sup>1)</sup>とし、医療系学科の学生に

とって授業の多さとそれに伴う課題の多さ、長期にわたる実習、国家試験などのストレッサーとなる出来事が課題であることを挙げている。また、梶田（1986）<sup>2)</sup>は、学生が自ら学ぼうとしない要因として、①授業でやっていることが何のためかわかっていない、②授業でやっていることが無味乾燥で面白くない、③教わっていることがいつもよくわからない、やるように言われても自分ではなかなかできない、④やったことを誰も認めてくれない、自分自身にも努力した成果が見えてこないという4つの視点を挙げている。医学は、日

進歩進化している。医療専門職である看護師にとって、継続的な自己研鑽が求められるのは言うまでもない。そこでは、科学的根拠に基づくアセスメント能力は必要不可欠である。つまり判断力・思考力(想像力)・表現力である。これらの能力を養うために、看護学生は学習課題や実習といったストレスに耐え、学生のうちから自己教育力を備えることが優先される課題と言えるのではないだろうか。

文部科学省(昭和58年)は、自己教育力を、主体的に学ぶ意志、態度、能力と定義している。また、梶田(1986)は、自己教育性(力)について『自己成長性』と『自学自習の力』の視点から、「自らのねがいやねらいを持ち、自らの現状と目標との関係についてはっきりとした認識を持つ、という自覚的姿勢を常に持ちながら、どのような場面においても目標の方向へ向かって自らに働きかけ、不断に自らの向上、成長、前進をはかる、という構えと意欲を、そしてそのための技能を、身に付けていくこと」<sup>3)</sup>と説明している。学生が、それらを養うためには思考の活性化が必要である。そこを下支えするのが教員による学力保証と成長保証である。本学学生の特徴として、対人関係に対する苦手意識を抱えている傾向があること、学年が上がるにつれて適応感が低下し、ストレスへの対処行動がうまくとれないと感じている学生が増える傾向がみられる。そこで、対人関係を育み仲間と共に学び合うという観点から、グループディスカッションを通して授業のリフレクションを継続することが、他者とのコミュニケーションのコツをつかみ、学習に対する自覚的姿勢を促し、創造的な学習に繋がられるのではないだろうかと考えた。つまり、従来のような一方向の知識伝達型の学習ではなく、学生が学習過程に参加することを促す参加型授業の一端としての取り組みである。そこで、授業開始時に、前回の授業をグループでリフレクションすることの有効性を検討したので報告する。

## Ⅱ. 研 究 方 法

### 1. 対象者と実施方法

A大学に所属する看護学科1・2年生を対象とした。対象者は筆者が担当した授業科目「人間関係論」および「精神看護学活動論Ⅱ」の履修生である。2017年に実施した「人間関係論」と「精神看護学活動論Ⅱ」を受講した学生126名には、グループによるリフレクション(グループ群)を、2018年に実施した「人間関係論」と「精神看護学活動論Ⅱ」を受講した学生112名には、教員の介入によるリフレクション(教員介入群)を実施した。

### 2. 期間

グループ群は2017年9月～2018年1月に、教員介入群は2018年9月～2018年12月にそれぞれ講義を行った。

### 3. 質問項目

「判断力と思考力」「表現力」「取り組みの姿勢」を柱とし、森ら(2017)<sup>4)</sup>を参考に、創造的な学習5項目、コミュニケーション力4項目、学習に対する自覚的姿勢5項目の構成で質問項目を作成した(表1)。各質問項目に対して、5件法(1:そう思わない～5:そう思う)で回答を求めた。

### 4. リフレクションの実施方法

#### 1) グループ群

授業開始時、毎回スクリーンでリフレクションの概要を提示し(表2)、5～6人のグループによるリフレクションを求めた。10分間のグループディスカッションの後、全員に向けて自由に発表する時間を設けた。

全15回の授業が終了した時点で、表1の項目による質問紙調査を実施し、同時に、よかったと思う点・良くなかったと思う点・その他について自由記述を求

表1 質問紙内容

判断力・思考力＝創造的な学習	表現力＝コミュニケーション力	取組の姿勢＝学習に対する自覚的姿勢
1. 授業への理解を深めることが出来た	6. 相手に分かりやすく伝えることが出来た	2. 授業に興味をもって参加することが出来た
3. 振り返りの有用性を理解することが出来た	8. 人前で発言する練習が出来た	5. 人の話をちゃんと聴くことが出来た
4. 自分の意見と他学生の意見との比較が出来た	9. 伝える工夫が出来た	7. 私語に流れることがあった
13. 相手の意見を尊重することが出来た	12. 聴く姿勢を考えることが出来た	10. 自ら考え、調べるきっかけになった
14. 自分の考えを整理し伝えることが出来た		11. 授業へのモチベーションが高まった

めた。

## 2) 教員介入群

毎回の授業開始時に教員が教室内を周回しながら質問し、学生に解答を求めた。その後、学生からの質問に教員がコメントする時間を設けた。

12回の授業が終了した時点でグループ群と同じ内容の質問紙調査を実施した。

## 5. 分析方法

表1の質問項目(14項目)ごとに $t$ 検定を用い、理論的中央値(3.0)と比較して、各質問項目の平均値がどのくらい離れているのかを検討した。さらに、「創造的な学習」「コミュニケーション力」「学習に対する

自覚的姿勢」の3分類から自由記述の文章を分析し、それぞれの記述内容の特徴を考察した。

## 6. 倫理的配慮

個人が特定されないように配慮すること、得られたデータは本研究以外の目的には使用しないこと、答えた内容が成績に何ら影響することはないこと、同時に協力をしないことによる不利益を被るようなことがないことを説明した後、調査協力を依頼した。回答をもって同意を得られたものとし、その場で回収した。

## Ⅲ. 結果と考察

グループ群126名のうち有効回答数は122部であった(有効回答率97%)。また、教員介入群112名のうち有効回答数は108部であった(有効回答率96%)。

グループ群の結果(表3)、質問項目7.を除いた全ての項目で、観測値の平均が理論的中央値3.0から有意に離れていることが明らかとなった。特に、「1. 授業への理解を深めることが出来た」「5. 人の話をちゃんと聞くことが出来た」「12. 聴く姿勢を考えることが出来た」「13. 相手の意見を尊重することが出来た」は、いずれも4.0以上の高値を示した。ただし、「7. 私語に流れることがあった」は2.84と、理論的中央値を下回ったが有意な差ではなかった。

教員介入群の結果(表4)、「1. 授業への理解を深めることが出来た」「2. 授業に興味をもって参加することが出来た」「3. 振り返りの有用性を理解することが出来た」「4. 自分の意見と他学生の意見との比較が

表2 リフレクションの概要の提示

**前回の授業のリフレクション(20分)**

《ねらい》

- ・主体的授業への取り組み
- ・仲間と議論することが出来る
- ・聴く姿勢を見に付ける
- ・伝わるように伝えることを身に付ける

＊グループディスカッション 10分  
テーマ:「前回の授業での学び」  
グループ: 近くの人5～6人

＊発表  
皆に伝えてください

表3 グループ群(2017年実施)の各質問項目の平均値と標準偏差,  $t$ 検定結果( $df = 121$ )

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
M	4.05	3.88	3.93	3.99	4.34	3.30	2.84	3.18	3.34	3.37	3.39	4.03	4.16	3.52
SD	0.61	0.85	0.89	0.82	0.61	0.84	1.03	0.99	0.83	0.91	0.94	0.80	0.77	0.85
$t$	18.93	11.46	11.55	13.45	24.24	4.00	1.76	2.01	4.60	4.49	4.55	14.28	16.65	6.70
$p$	***	***	***	***	***	***		*	***	***	***	***	***	***

注 \*\*\* $p < .001$ , \* $p < .05$

表4 教員介入群(2018年実施)の各質問項目の平均値と標準偏差,  $t$ 検定結果( $df = 107$ )

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
M	4.43	4.24	4.44	4.18	4.49	3.52	2.16	3.44	3.77	3.81	3.95	4.41	4.34	3.81
SD	0.68	0.68	0.72	0.91	0.69	0.93	1.10	1.07	0.90	0.91	0.94	0.77	0.78	0.97
$t$	21.69	19.00	20.72	13.41	22.55	5.81	7.97	4.30	8.89	9.23	10.58	18.99	17.81	8.66
$p$	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***

注 \*\*\* $p < .001$

できた」「5. 人の話をちゃんと聞くことが出来た」において4.0以上の高値を示した。「7. 私語に流れることがあった」は、教員が教室を周回しながらのリフレクションであることも影響し、2.16と他項目よりも有意に低値を示した。

理論的中央値から有意な差がみられた質問項目において、いずれもグループ群より教員介入群の方が自己評価は高い数値を示していた。一方、私語に流れる傾向はグループ群の方が高かった。両者を比較した場合、グループ群によるリフレクションが教員介入群よりも学習効果が高いとは言えない。しかし、このリフレクションの目的は、自己教育力を養うことにある。つまり、主体的に学ぶ意志・態度・能力である。

そこで、表5に3分類から代表的な自由記述をまとめた。表5を概観すると、創造的な学習の視点からは、「考えることが出来た」「自分の学びになった」「気づくことが出来た」「違う考えを知るきっかけになった」「要点を振り返ることが出来た」「気づかされることが良かった」など、前向きな声が聞かれている。また、コミュニケーション力の視点では、「相手に伝わるように伝える」「意見を伝える練習になった」「人前で発表する練習になった」「いろいろな人の意見を聴くこ

とが出来た」など、聴く、伝える、発表し合うなど、仲間を意識しながらの参加が出来たのではないだろうか。さらに、学習に対する自覚的姿勢の視点では、「参加しようと思えた」「確認することが出来た」「考えることが出来た」「伝えようと思った」「考えを整理することが出来た」など、課題に対する前向きな姿勢が感じられた。

さらに詳しく分析するため、新たに「私語に流れる」と「教員介入によるリフレクションの方が良かった」という分類を作り、これに該当する記述内容を抽出した(表6)。私語については、「仲の良い子と行うことが多いため私語が入ってしまう」「自分は振り返りを行いたくても、周りがそうではない」「口数の少ない人を話し合いに参加してもらう難しさ」「積極的に発言する人とならない人」などのように、グループで進めることの難しさを感じた学生の声も聞かれた。教員介入によるリフレクションの方が良かったと思う点として、「先生の振り返りで大切そうな部分を確認できた」「先生が重要な点を言ってくれていて、テスト勉強もしやすかった」「学生のみ発表だと、大事な点を逃しているような気がする」などが見られた。これらの内容から、学生の傾向としては、目の前にあるテスト対策が

表 5 自由記述

表 5-1 創造的な学習

・他のグループの意見などを聴いて、自分の意見との違いを考えることが出来た。
・他者の意見を聞くことが、自分の学びになった。
・自分だけでは気づくことが出来なかった点に気づくことが出来た。
・自分とは違う考えを知るきっかけになった。
・前回のことを思い出し、要点を振り返られた。
・他の人の発表で、こういうところがいいな、こういう視点や考え方もあるんだなと気づかされることが良いと思った。

表 5-2 コミュニケーション力

・自分の意見や考えをまとめ、相手に伝わりやすいような内容を整理しながら話すことが出来た。
・相手の話を尊重しながら聞き、理解する練習になった。
・自分の意見を伝える練習になった。
・人の前で発表する練習になった。
・どうしたら相手に分かりやすく伝わるのかを考えるようになった。
・いろいろな人の意見を聞くことが出来た。
・仲間と発表し合うことが良かったと思う。
・普段あまり話すことのない人とディスカッションできたのは、様々な意見を聞くきっかけになった。
・短時間で話し合いをし、意見をまとめる良いきっかけになった。

表 5-3 学習に対する自覚的姿勢

：授業へ主体的に参加しようと思えた。
：講義での要点を改めて確認することが出来た。
：振り返りをすることで、曖昧になっていた点を確認でき、看護の上でどのように役立てるかを考えることが出来た。
：伝えようと思ったので、自分の中で理解をして伝えるという力が付いたと思う。
：自分の考えを整理することが出来た。
：振り返りをすることで、前回はこんなことを学んだなと思い出し、今日学ぶこととどんな繋がりがあるのかを考えることが出来た。



表 6 自由記述

表 6-1 私語に流れる

・自分は振り返りを行いたくても、周りがそうではないと私語に流れることがあった。
・あまり発表を積極的にする人がいなかった。
・口数の少ない人を話し合いに参加してもらえようようにすることがとても難しかった。
・グループの中でも話す人と話さない人が決まっていた。
・積極的に発言する人とならない人がいる
・仲の良い子と行うことが多いため、私語が入ってしまうこともあった。

表 6-2 教員によるリフレクションのほうが良かったと思う点

・今迄は、先生が重要な点を言ってくれていて、テスト勉強もしやすかったが、今は自分たちが重要なと思っている部分だけなのでテストが不安
・自分たちの振り返りも大事だが、先生の振り返りで大切そうな部分を再確認できたので、今回それがなかったのが少し大変
・テストで出題される部分をもう少し言って欲しかった。振り返りを話し合うのではなく、人に当てる形式にして欲しかった
・学生のみ発表だと、大事な点を逃している気がする
・今迄のように先生の大事な所の振り返りがあると良かった
・大事な所を発表しているのだけれど、先生から見ても大事な所を的を得て発表できているのか不安

優先であり、梶田（1986）の言う、学生が自ら学ぼうとしない要因の一つである「授業でやっていることが何のためかわかっていない」という内容が裏付けられる。このことから、学生の傾向としては、受け身的傾向が強く、知識の定着、学びを深めるという自覚の希薄さが感じられる。また、復習に時間をかけることなく次の授業に出席している学生もあり、このリフレクションの時間を当てにしていることが伺え、授業に対する主体的に学ぶ姿勢の乏しさを感じざるを得ない。その他、グループディスカッションでの自由記述から、良くない点としては、「他者の話を聴いていてもあまり集中できない時があった」「発表する人が固定されてしまったような気がする」「発表する勇気がなかった」などからも、グループディスカッションのねらいを理解して取り組んでいたとは言い難い。グループディスカッションでの積極的な発言を導き出すには、学生のモチベーションを高めるための支援と学生自身が主体的に取り組もうとする参加型授業への仕組みづくりが必要であろう。

本学看護学生の傾向として1～3年生に比べ、4年生の自己教育力が高い傾向にあるが、この一因として、西田ら（2013）が述べているように、看護学科の4年生は、就職や国家試験、3年次からの臨地実習などに向けた学習を日常的に行っている。そのことが学習に対する自覚を促し、それが自己教育力を高める結果となっていることが考えられる。このことを踏まえて、医療専門職を目指す学生に対し、1・2年生の早

い段階から学習意欲を刺激することが、自己教育力を自覚し生涯にわたって学習する力を保証することに繋がると言える。

## IV. 結 語

本研究において、自己教育力の向上を目指し授業のリフレクションの有効性を検討した。そこでは、グループでの「学び合い」による主体的な学習が期待された。少なくともリフレクションが創造的な学習・コミュニケーション力・学習意欲に対する自覚的姿勢において有意な差がみられた。しかし、学習意欲が低く私語に流れる学生がいたことは否めない。これらの学生に対し、リフレクションと学習成果の関連から、期待される効果を可視化したり、グループで学ぶという観点からクラス全体の学習意欲を上げるなど参加型授業としての工夫が課題であることが分かった。

## V. 文 献

- 1) 西田斉二・橋本世奈・福原啓太・田丸佳希・杉原勝美・北山淳：リハビリテーション医療系学生の抑うつ状況についてー学習性無気力の観点からー，四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要，9，27-34，2013.
- 2) 梶田叡一：自己教育への教育，明治図書，59-69，1985.
- 3) 梶田叡一：自己教育への教育，明治図書，29-30，1985.
- 4) 森裕生・網岡敬之・江木啓訓・尾澤重知：学生が自己評価基準を設定し学習内容の振り返りを行う大学授業の実践と評価，京都大学高等教育研究，23，13-24，2017.